

富山県

南砺市埋蔵文化財分布調査報告5

－福光地域4－

2009年度

2010年3月

南 砧 市 教 育 委 員 会

富山県

南砺市埋蔵文化財分布調査報告5

－福光地域4－

2009年度

2010年3月

南 砧 市 教 育 委 員 会

序

南砺市には、国指定の高瀬遺跡や世界遺産にも登録されている相倉・菅沼の合掌造り集落などの貴重な文化財が数多く存在しています。また、遙か太古からの先人の営みも残されており、立野ヶ原台地における旧石器時代の遺跡群をはじめ、市内の各所には縄文時代から中世までの遺跡が多数確認されています。

このような文化財は、現代に生きる我々が未来へと受け継ぐ財産です。地域で産まれ、育まれてきた文化財は保護・活用することで地域の発展に貢献すると考えております。市内に残された遺跡は市の歴史を語るうえで他に変えることのできない貴重な資料であり、大切な文化遺産です。

市教育委員会では遺跡の把握、保存に努めるために詳細分布調査を行っています。市内の遺跡地図を充実させることは、今後の遺跡の保存と整備、開発行為との調整において欠かせません。

この報告書が今後の学術研究や、郷土の歴史を知るための参考となり、文化財保護に対する理解の一助になりましたら幸いです。

最後に、調査の実施にあたり、多大なご協力とご理解をいただきました地元の方々、関係者の方々に深く感謝申し上げるとともに、今後も変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成22年3月

南砺市教育委員会
教育長 浅田 茂

例　　言

- 1 本書は南砺市教育委員会が国庫補助をうけて実施している、市内遺跡詳細分布調査（2009年度）の調査報告である。
- 2 調査は富山大学考古学研究室の指導と協力を得て、南砺市教育委員会が主体となり実施した。
- 3 今年度の調査は、ひらき市福光地域ひらき広瀬地区かいへいづ（開発・天神・竹内・小山・山本）、ひらき瀬館地区せいかん（祖谷・小坂・館）、西太美地区せいだい（才川七・広谷・香城寺）を対象とした。調査期間は次のとおりである。

平成21年4月11日(土)～4月12日(日)　— 広瀬地区、廣瀬館地区
平成21年10月31日(土)　　　　　　　— 西太美地区
- 4 調査事務局は南砺市教育委員会文化課におき、文化財係長野村和善、文化財係主任佐藤聖子・宮崎順一郎が調査事務を担当し、文化課長滝由紀夫が統括した。現地踏査、資料の整理、本書の執筆と編集は、以下の調査担当者、調査補助員が分担して行い、執筆の分担は本文に記した。

調査担当者	富山大学人文学部考古学研究室	教授	黒崎　直
	同	准教授	高橋　浩二
	南砺市教育委員会文化課文化財係	主任	佐藤　聖子
	同	主任	宮崎順一郎

調査補助員	田上和彦・舟崎久雄（富山大学人文学部考古学研究室大学院生）
	今津和也・千葉真吾（富山大学人文学部考古学研究室四回生）
	鶴野千恵美・生方香織・及川実沙子・河合陽介・北村史織・綴繼文佳・小浦方志織・東海林心・百瀬香菜子（富山大学人文学部考古学研究室三回生）
	井澤　昇・井上恭一・岩崎俊樹・北島裕子・塙澤恭輔・瀬原史織・宮崎厚平（富山大学人文学部考古学研究室二回生）
	河合陽子・西川和美（南砺市臨時雇用職員）
- 5 現地調査にあたって、福光地域各地区の方々に多大なご協力、ご理解を得た。記して深く感謝したい。
- 6 採集遺物および記録図面は、南砺市教育委員会が保管している。
- 7 本書の挿図・写真図版の表示は次のとおりである。
 - (1)方位は真北である。
 - (2)挿図の遺物実測図の縮尺は1/4・1/3・3/4である。
 - (3)写真図版の遺物番号は遺物実測図の番号と一致する。

本文目次

序 文	
例 言	
目 次	
I 位置と環境	1
II 調査の経過	2
第1表 調査区内周知の埋蔵文化財包蔵地	3
III 調査の概要	6
1 遺跡と探集遺物	6
2 遺物の散布状態	9
IV まとめ	11
参考文献	12
第2表 調査結果遺跡一覧表	13
図 版	
写真図版	

図版目次

第1図 南砺市位置図	
第2図 調査地区剖図 (1/200,000)	
第3図 調査地区概要図 (1/30,000)	
第4図 調査結果概要図 (1/15,000)	
第5図 古代の遺物散布状況 (1/15,000)	
第6図 中世の遺物散布状況 (1/15,000)	
第7図 近世・近代の遺物散布状況 (1/15,000)	
第8図 遺物実測図 (1)	
第9図 遺物実測図 (2)	

写真図版目次

図版1 遺跡全景 (1)	
図版2 遺跡全景 (2)	
図版3 遺跡全景 (3)	
図版4 遺物跡景 (4)	
図版5 遺物跡景 (5)	
図版6 遺物跡景 (6)	
図版7 遺物写真 (1)	
図版8 遺物写真 (2)	

I 位置と環境

平成16年11月1日、砺波地方所在の八町村であった城端町、平村、上平村、利賀村、井波町、井口村、福野町、福光町が合併し南砺市が誕生した。南砺市は富山県の南西部端に位置し、北は砺波市、小矢部市に、東は富山市に、西は石川県金沢市、南は岐阜県飛騨市や白川村に隣接している。山間部は、白山国立公園に指定され、すぐれた自然景観を残しており、庄川や小矢部川の流れる平野部は水田地帯として、また、「散居村」として知られている。面積は668.86平方kmで東西約26km、南北約39kmに広がっている。

旧石器時代の遺跡は、福光・城端両地域の境に位置する立野ヶ原を中心とし、点在する144か所の遺跡は立野ヶ原遺跡群と呼ばれている。めのうや鉄石英が豊富で、それらを利用した石器製作場所がいくつか確認されており、富山県内で最も古い遺跡群の一つとして知られている。

縄文時代に入ると、生活の場は平野部にも広がる。草創期から前期にかけて確認している遺跡数は少ないものの、中期には西原A遺跡や徳成遺跡、後・晩期には後期の指標遺跡である井口遺跡をはじめ安居五百歩遺跡、五瀬遺跡がある。

弥生・古墳時代の遺跡は、確認されている数が少ないと、近年のほ場整備事業等により神成遺跡では、弥生終末期から古墳時代にかけての竪穴住居や周溝遺構を確認しており、また梅原安丸Ⅲ遺跡では、古墳時代中期の竪穴住居を確認している。

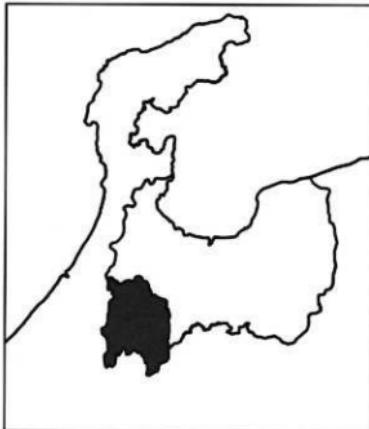
古代の遺跡には、7世紀・9世紀の竪穴住居跡を約10棟確認した在房遺跡や、9世紀前半の梅原落戸遺跡がある。その他、中世の指標となる大集落として知られる梅原胡摩堂遺跡の東側で、8世紀から10世紀にかけての竪穴住居等の遺構を確認している。またこれら古代の集落に日常食器を供給していたであろう窯に安居・岩木窯跡群がある。

中世には、平野部に大規模な集落が広がる。梅原胡摩堂遺跡をはじめ久戸遺跡から田尻遺跡に至る中世集落跡は南北2km、東西1kmにわたり、掘立柱建物、竪穴状土坑、井戸、区画溝などの遺構や、中世土師器、珠洲、青磁、白磁、瀬戸などの遺物が多く確認されている。

今年度の対象地域は、広瀬地区の一部（開発・天神・竹内・小山・山本）、広瀬館地区（祖谷・小坂・館）、西太美地区の一部（才川七・広谷・香城寺）である。石川県金沢市との県境である医王山山麓に点在する集落で、いずれの地区も中世に開けたとされる。この地域は京都円宗寺の所領として成立した広大な莊園である砺波郡石黒荘の一部で、弘瀬郷と太海（太美）郷とされている。

周知の埋蔵文化財包蔵地は主に縄文時代・古代・中世・近世の遺跡が存在する。縄文時代は調査されていない散布地がほとんどだが、五瀬遺跡からは石組遺構などが確認されている。古代については古館遺跡で発掘調査が行われ、平安時代の遺構が検出されている。中世では寺院跡や城館跡が多く周知されており、医王山の山岳宗教の波及がうかがえる。

（宮崎順一郎）



第1図 南砺市位置図

II 調査の経過

平成16年11月の町村合併までに各々の旧町村で確認していた埋蔵文化財包蔵地（以下、「包蔵地」）の数は、590ヶ所あまりである。これらの包蔵地の多くは、古い伝承に基づくもの、開発行為にかかる事前調査によつて発見されたものである。町村合併時において、詳細な分布調査が行われていたのは、旧福野町全域、旧城端町域の平野部、旧福光町・旧井口村域において県営は場整備事業等の大規模な開発行為が行われた地域のみであった。市内には、未だ包蔵地の詳細が全く確認されていない未調査地区が多く、包蔵地の保護と開発行為との円滑な調整を計していくためにも、詳細な分布調査を実施することとなった。

分布調査の実施については、旧城端町で平成13年度より7ヶ年にわたって町全域を調査する予定にしていたが、町村合併にあたり計画変更を行い、平成18、19年度に調査予定であった旧城端町域の山間部を先送りし、未だ未調査地区が多い南砺市の平野部について先行し調査を行うこととした。

南砺市平野部における未調査地区は、福光地域（調査実施済みである北山田地区、高宮・小林・殿の一部、岩木、祖谷、竹内を除く）、井口地域の一部、井波地域である。このうち、福光地域を4分割、井波地域、井口地域を合わせて2分割し、未調査地区を7分割し7ヶ年で南砺市平野部の調査を実施することとした（第2図参照）。調査の成果は年度毎にまとめ公表する予定である。

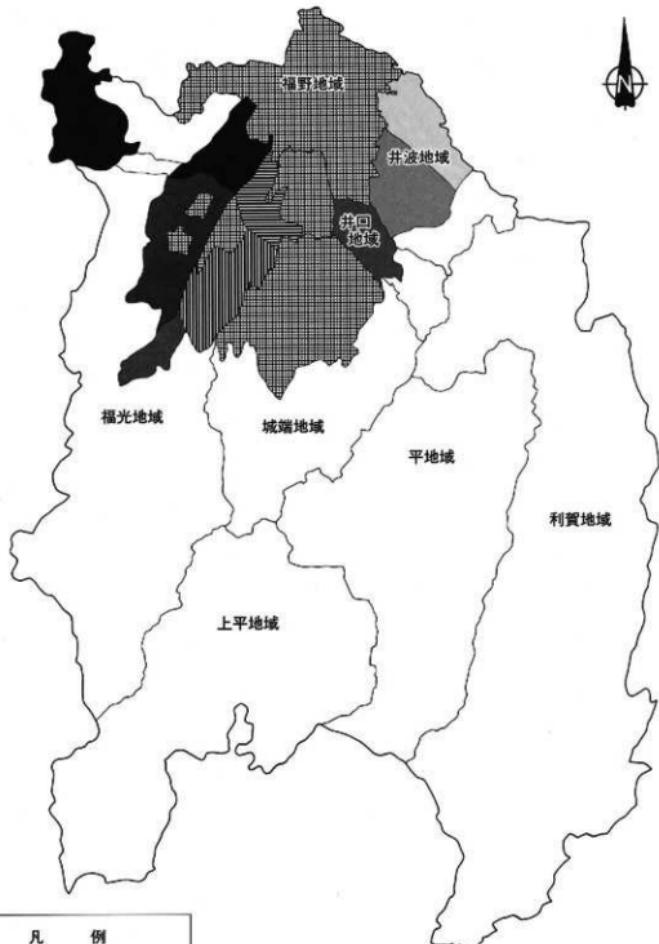
調査は、南砺市が国庫補助を受け、富山大学考古学研究室の指導・協力を得て進めることとした。現地踏査は広瀬、広瀬館地区を春期に行い、西太美地区を秋期に行った。踏査の際は、1/2,500もしくは1/5,000の地形図を持参し、田畠一枚一枚をくまなく踏査し、土器、石器等の遺物を採集して、採集地点を図面に記録した。採集した遺物は、洗浄後採集地点を注記し、実測作業をおこなった。その後、遺物の散布状況、地形、伝承等も加味しつつ、包蔵地の範囲を決定した。

今年度の調査対象地において、調査実施までに確認している周知の包蔵地及び調査履歴については、第1表のとおりである。

（宮崎順一郎）

第1表 調査区内の埋蔵文化財包蔵地

遺跡名	ふりがな	所在地	主な時代	種別	調査歴	調査原因	備考	基団No.
五瀬遺跡	ごせいせき	福光	縄文・古代・中世	縄文散布地 古代散布地 中世散布地	昭和18年度試掘調査 平成元年度試掘調査 平成8年度試掘調査	中学校建設 河川改修・施設建設 個人住宅建設	昭和48年調査では 縄文遺構確認 試掘調査の結果遺構なし	1
福光天神遺跡	ふくみつてんじんいせき	大神	縄文・近世	縄文晚期 近世	平成7年度試掘調査 平成8年度試掘調査	資材置場造成 個人住宅建設	式庭跡以前に墳塚石碑 匕首出土	2 4
竹内遺跡	たけうちいせき	竹内	縄文	縄文散布地	なし			
竹内Ⅱ遺跡	たけうちちにいせき	竹内	縄文・古代・中世	縄文散布地 古代散布地 中世散布地	なし		H9新規	5
竹内Ⅲ遺跡	たけうちさんいせき	竹内	縄文	縄文散布地	なし		H9新規	6
竹内Ⅳ遺跡	たけうちよんいせき	竹内	縄文	縄文散布地	なし		H9新規	7
西王山千手堂跡	いおうせんせんじゅどうあと	竹内	古代・中世	古代社寺 中世社寺	なし			8
山木城跡	やまとじょうあと	山本	中世(戦国)	中世城館	なし			9
善徳寺跡	ぜんとくじあと	山本	戦国	中世社寺	なし			10
山木遺跡	やまとといせき	山本	縄文・中世・近世	縄文散布地 中世散布地 近世散布地	平成16年試掘	住宅地造成		11
猿谷寺跡	かきたんらあと	船	中世	中世社寺	なし			14
妙教寺跡	みょうきょうじあと	船	中世	中世社寺	なし			15
船白山遺跡	たちしらやまいせき	南谷	古代～中世	古代不明 中世不明	なし			16
梅の宮跡	うめのみやあと	小坂	中世	中世その他の	なし			17
根谷Ⅰ遺跡	そだににいせき	粗谷	縄文	縄文散布地	なし			18
本牧寺跡	ほんきょうじあと	粗谷	中世	中世その他の	平成14年度試掘調査	駐車場造成		19
根谷Ⅱ遺跡	そだににいせき	粗谷	中世	中世散布地	なし			20
根谷御坊山遺跡	そだににぼうやまいせき	粗谷	縄文	縄文散布地	なし			21
根谷神明社遺跡	そだにしんめいしゅまいせき	粗谷	中世	中世社寺	なし			22
善念寺跡	ぜんねんじあと	粗谷	中世	中世社寺	なし			23
善休寺跡	ぜんきゅうじあと	粗谷	中世	中世社寺	なし			24
粗谷遺跡	そだにいせき	粗谷	中世	中世その他の	なし			25
矢筈畠遺跡	やぐらばたいたいせき	粗谷	中世	中世社寺	なし			26
八幡山跡	はちまんざらあと	粗谷	不明	八幡神社跡	なし			27
西光寺・常本寺・真教寺跡	さいこうじ・じょうほんじ・しんきょうじあと	粗谷	中世	中世社寺	なし			28
古館遺跡	ふるたるたらいせき	才川七	古代	古代墓葬	昭和48年度発掘調査 平成8年度試掘調査	ほ場整備 資材置場建設	昭和48年調査では 古代遺構確認	29
香山西跡	こうざんじあと	才川七	古代・中世	古代社寺 中世社寺	なし			30
カナン堂遺跡	かなんどういせき	才川七	小明	不崩社寺	なし		カナン堂跡	31
寒道堂遺跡	しゃかどういせき	才川七	不明	不明祭祀	なし			32
宗善寺遺跡	そうぜんじいせき	才川七	中世～近世	中世社寺 近世社寺	なし		宗善寺跡	33
松寺水福寺跡	まつでらようふくじあと	才川七	中世	中世社寺	平成9年度試掘調査	道路改良		34
ハクランク神跡	はくらくでかまあと	才川七	古代	古代跡	なし		百楽園跡	35
才川七遺跡	さいかわしちいせき	才川七	縄文	縄文散布地	なし			36
松寺永福寺跡	まつでらようふくじ	才川七	近世	近世墓	なし			37
近世墓跡	きんせいほあと	才川七	近世	近世墓	なし			
才川七の場遺跡	さいかわしちばいせき	才川七	縄文	縄文散布地	なし			38
才川城跡	さいかわじょうあと	才川七	中世	中世城館	なし		才川城跡・太美城跡	39
婆々堂遺跡	ばばどういせき	広谷	不明	不明祭祀	なし			40
広谷經塚	ひろたにきょうづか	広谷	中世～近世	中世經塚 近世經塚	なし			42
広谷林遺跡	ひろたにばやしいせき	広谷	縄文	縄文散布地	なし			43
香城寺遺跡	こうじょうじいせき	香城寺	中世・近世	中世集落 中世社寺 中世祭祀	昭和56年度試掘・ 発掘調査	ほ場整備	中世遺構確認	44
香城寺吉ヨウジヤ遺跡	こうじょうじょうじょうじや ばたけいせき	香城寺	中世・近世	中世散布地 近世散布地	なし		周知	45



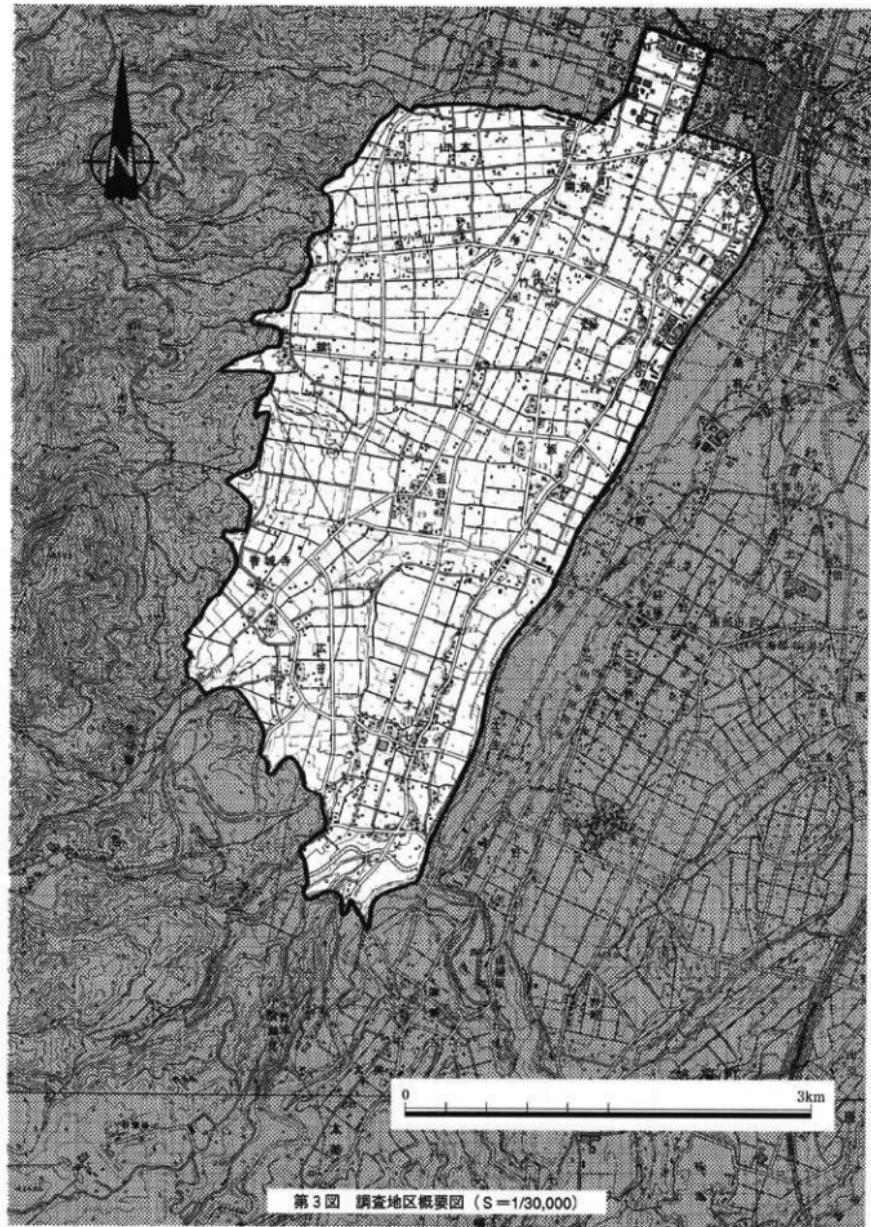
凡　例

- | | |
|---|--------------|
| ■ | 調査完了地域 |
| ■ | 平成18年度調査実施地域 |
| ■ | 平成19年度調査実施地域 |
| ■ | 平成20年度調査実施地域 |
| ■ | 平成21年度調査実施地域 |
| ■ | 平成22年度調査予定地域 |
| ■ | 平成23年度調査予定地域 |
| ■ | 平成24年度調査予定地域 |
| □ | 平成25年度調査予定地域 |

0

10km

第2図 調査地区割図 ($S = 1/200,000$)



III 調査の概要

1 遺跡と採集遺物

(1) 小山A遺跡

採集した遺物は、須恵器5片、土師器2片、珠洲4片、古銭1枚である。そのうち11点を図示した。

1は土師器椀の底部である。底径は約5cmを測る。外面にはロクロナデ調整を施す。胎土は密である。色調は橙色を呈する。焼成は良好である。

2は上師器椀の底部である。底径は約5cmを測る。外面にナデ調整を施す。底部外面には糸切り痕がみられる。胎土は密で1mm程の砂粒を含む。色調は灰白色を呈する。焼成は良好である。

3は須恵器杯の口縁部である。口径は約13cmを測る。口縁端部は若干の外反をもって丸くおさめる。時期は9世紀頃のものと思われる。内外面にはロクロナデ調整を施す。胎土は密である。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

4は須恵器壺の胴部である。外面には平行タタキ目、内面には同心円の当て具痕を残す。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は外面灰褐色、断面にぶい橙色、内面青灰色を呈する。焼成は良好である。

5は須恵器壺の胴部である。外面には平行タタキ目、内面には同心円の当て具痕を残す。胎土は密であり、3mm以下の砂粒を含む。色調は外面灰白色、内面濃い灰白色を呈する。焼成は良好である。

6は須恵器の壺か壺の胴部である。外面には平行タタキ目、内面にはロクロナデ調整を施す。外面には自然釉が残る。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は外面が茶褐色、内面が灰色を呈する。焼成は良好である。

7は珠洲壺の胴部である。外面は平行タタキ目、内面は当て具痕を残す。胎土は密で1mm以下の砂粒を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

8は珠洲壺の胴部である。外面にはタタキ目、内面には指頭痕を残す。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

9は珠洲壺の胴部である。外面には平行タタキ目が施され、内面は撫で回し技法によって当て具痕が消されていると思われる。内外面に粘土のつなぎ目の跡がある。胎土は密で、1mm以下の砂粒を含む。色調は灰白色を呈する。焼成は良好である。

10は珠洲すり鉢の口縁部である。口径は約38cmを測る。端部には横目波状の模様が施され、肥厚した内端に約1.5cmの平面をとる。時期は吉岡氏による編年の珠洲V期～VI期（15世紀～16世紀）に属すると考えられる（吉岡1994、以下珠洲編年はこれに準拠する）。外面にはロクロナデ調整、内面には御目を施す。胎土は密で、1mmの砂粒を含む。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

11は寛永通宝銅錢である。裏面に「文」字が記されている。1668年から1683年に江戸亀戸において鑄造されたものであると思われる。
(岩崎俊樹・北島裕子・塙澤恭輔・潮原史織・宮嶋厚平)

(2) 小山B遺跡

採集した遺物は、須恵器1片、土師器3片、珠洲1片である。そのうち4点を図示した。

12は土師器椀の底部である。底径は約8cmを測る。調整は内外面とも風化のため不明である。胎土は密で細かい砂粒を含む。色調はにぶい橙色を呈する。焼成は良好である。

13は土師器皿の底部である。底径は約5cmを測る。内面はナデ調整、外面はロクロナデ調整を施す。胎土は密で1mm以下の砂粒が混ざる。色調はにぶい橙色を呈する。焼成は良好である。

14は須恵器の甕か壺の胴部である。外面は平行タタキ目、内面には同心円の当て具痕を残す。内外面とも自然釉が残る。胎土は密である。色調は外面が暗褐色、内面が黒褐色、断面が灰色を呈する。焼成は良好である。

15は珠洲甕の胴部である。外面にはタタキ目、内面には指頭痕を残す。胎土は密で、1mm以下の砂粒を含む。色調は外面が灰色、内面が黄灰色を呈する。焼成は良好である。

(北島裕子・塩澤恭輔・瀬原史織)

(3) 天神才勝遺跡

採集した遺物は、須恵器3片、珠洲2片、瀬戸美濃1片である。そのうち2点を図示した。

16は瀬戸美濃天目茶碗の底部である。底径は約4cmを測る。胴部内外面には褐色の鉄釉を施す。底部内側には模様が施される。胎土は密である。色調は断面灰白色を呈する。焼成は良好である。

17は珠洲甕の胴部である。外面には平行タタキ目、内面には当て具痕を残す。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

(井澤 昇・井上恭一)

(4) 広谷表田遺跡

採集した遺物は、珠洲2片、唐津1片、近世陶器1片、近世磁器1片である。そのうち、4点を図示した。

18は珠洲の甕か壺の胴部である。外面には平行タタキ目を施す。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

19は珠洲甕の胴部である。外面には平行タタキ目、内面には指頭痕を残す。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

20は近世の唐津碗の胴部である。内外面には褐色の釉を施す。内面には灰白色の釉で繖状の模様を描く。胎土は密である。色調は断面にぶい赤褐色を呈する。焼成は良好である。

21は近世の磁器碗の口縁部である。口径は約10cmを測る。内外面には灰白色の釉を施す。内外面に青灰色の染付の模様が描かれている。胎土は密である。色調は断面濃い灰白色を呈する。焼成は良好である。

(岩崎俊樹・宮嶋厚平)

(5) 西光寺・堂本寺・真教寺跡

採集した遺物は、須恵器1片、珠洲1片である。そのうち1点を図示した。

22は珠洲甕の胴部である。外面には平行タタキ目、内面には指頭痕を残す。胎土は密で1mm以下の砂粒を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

(井上恭一)

(6) 香城寺遺跡

採集した遺物は珠洲2片である。全てを図示した。

23は珠洲甕の胴部である。外面にタタキ目、内外面にロクロナデ調整を施す。胎土は密で1mm以下の砂粒を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

24は珠洲甕の胴部である。外面には平行タタキ目、内面には指頭痕を残す。また内外面に錆が付着している。胎土は密で1mm以下の砂粒を含む。色調は内面が灰黄色、外側が灰褐色を呈する。焼成は良好である。

(瀬原史織)

(7) 祖谷遺跡

採集した遺物は須恵器1片である。

(塩澤恭輔)

(8) 香山寺跡

採集した遺物は珠洲1片、須恵器2片であった。

(塩澤恭輔)

(9) 松寺永福寺跡

採集した遺物は珠洲1片であった。

(塩澤恭輔)

- (10) 五瀬遺跡、(11) 福光天神遺跡、(12) 竹内遺跡、(13) 竹内II遺跡、(14) 竹内III遺跡、(15) 竹内IV遺跡、(16) 医王山千手堂跡、(17) 山本城跡、(18) 善徳寺跡、(19) 山本遺跡、(20) 柿谷寺跡、
(21) 妙教寺跡、(22) 頭白山遺跡、(23) 梅の宮跡、(24) 祖谷II遺跡、(25) 本教寺跡、(26) 祖谷III遺跡、(27) 祖谷御坊山遺跡、(28) 祖谷神明社遺跡、(29) 薩念寺跡、(30) 薩休寺跡、(31) 矢倉畑遺跡、(32) 八幡社跡、(33) 古館遺跡、(34) カノン堂遺跡、(35) 祈願堂遺跡、(36) 宗善寺遺跡、(37) ハクラクデン墓跡、(38) 才川七遺跡、(39) 松寺永福寺近世墓跡、(40) 才川七的場遺跡、(41) 才川城跡、(42) 藩々堂遺跡、(43) 広谷経塚、(44) 広谷林遺跡、(45) 香城寺ジョウヤジ畑遺跡

今回の調査において遺物は採集されなかった。

(塩澤恭輔)

その他の採集遺物

遺跡範囲外の採集品についても、将来的な遺跡発見の可能性を高めるため、すべての採集地点を記録している。そのうち主なものについて示す。

25は繩文土器の胴部である。外面は風化しているが一部に縄文がみられる。胎土は砂礫を含み、色調は外面はにぶい黄褐色で、内面と断面は黒色を呈する。焼成は良好である。

26は土師器の楕か皿の底部である。底径は約11cmを測る。調整は内外面ともに風化のため不明である。胎土は密であり、2mm以下の砂粒を含む。色調はにぶい橙色を呈する。焼成は良好である。

27は須恵器壺の口縁部である。口縁端部は外傾する幅約1cmの嘴形で少しくぼんだ面をもつ。時期は9世紀頃のものと思われる。内外面にはロクロナデ調整を施す。胎土は密で1mm以上の砂粒をわずかに含む。色調は褐灰色を呈する。焼成は良好である。

28は須恵器壺の胴部である。外面は堅格子状のタタキ目、内面には指頭痕を残す。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

29は瀬戸美濃御皿の口縁部である。口径は約20cmを測る。口縁端部は上方に面を持ち、内側に反しのようなくき出しがある。時期は15世紀末～16世紀頃のものと思われる。外面にはロクロナデ調整、内面には卸目を施す。内外面の上部にオリーブ色の釉を施す。胎土は密で1mm以下の砂粒を含む。色調は内外面は橙色で断面は灰白色を呈する。焼成は良好である。

30は青磁碗の胴部である。内外面ともにオリーブ灰色の釉を施す。釉の厚さは約0.8mmである。胎土は密である。色調は断面灰白色を呈する。焼成は良好である。

31は越前の壺か壺の胴部である。内外面にロクロナデ調整を施す。外面には押印文様の一部が認められる。胎土は密であり、3mm以下の砂粒を含む。色調は外面はにぶい褐色、内面は暗灰黄色を呈する。焼成は良好である。

32は珠洲すり鉢の胴部である。外面はロクロナデ調整、内面には約2.5cm幅に9条の卸目を施す。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

33は珠洲すり鉢の胴部である。内外面にロクロナデ調整、内面には約0.5cm幅で4条の卸目を施す。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は外面が青灰色、内面が茶褐色を呈する。焼成は良好である。

34は珠洲すり鉢の底部である。内外面ともにロクロナデ調整、内面には卸目を施す。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

35は珠洲すり鉢の口縁部である。口径は約22cmを測る。口縁形態が外傾して面をとることから、時期は珠洲Ⅳ期（14世紀前半）に属すると考えられる。内外面にはロクロナデ調整、内面には卸目を施す。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

36は珠洲壺の口縁部である。口径は約48cmを測る。端部は外屈し、約2cmの平坦面がある。頸部には幅約6mmの溝がある。時期は珠洲Ⅲ期（13世紀後半）に属する。外面には口縁部にロクロナデ調整が施される。頸部から下には平行タタキ目、内面には当て具痕を残す。胎土は密であり、3mm以下の砂粒を含む。色調は灰白色を呈する。焼成は良好である。

37は陶器器皿の底部である。底径は約15cmを測る。内面には約3cm幅で8条の卸目を施す。外面にはロクロ回転ヘラケズリ調整を施す。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は内外面ともにぶい赤褐色を呈する。焼成は良好である。

38は唐津碗の口縁部である。口径は約11cmを測る。口縁部はわずかに外反するものである。内面には縞状に白釉を施す。胎土は密である。断面灰オリーブ色を呈する。焼成は良好である。

39は近世陶器碗の口縁部である。口径は約9cmを測る。内外面にはぶい赤褐の釉を施す。胎土は密である。色調は断面が浅黄橙を呈する。焼成は良好である。

40は磁器碗の底部である。底径は約4.4cmを測る。内面にトチン痕が2箇所認められる。内外面に明緑灰色の釉を施す。内面には青灰色の線が交差した草の模様を描く。胎土は密で、断面の色調は灰白色を呈する。焼成は良好である。

（井澤昇・井上恭一・北島裕子・塩澤恭輔・瀬原史織・宮嶋厚平）

2 遺物の散布状況

今回の調査で採集した遺物の総数は、春期69片、秋期18片の計87片である。これらの散布状況を時期別に大別、集計した。1辺500mの方眼を設け、方眼1つを1ブロックとして、ブロック単位で採集遺物点数を示すこととする。

各時期の総量は、縄文1、古代21、中世23、近世12、近代27、時期不明3片である。

（1）古代の遺物散布状況（第5図）

古代の遺物は須恵器16片、土師器5片を13ブロックから採集した。

散布状況は調査区の中心部に散漫である。2片以上のまとまりがあるブロックは5ブロックある。その5ブロックの中には新たに発見された小山A遺跡、小山B遺跡、天神才勝遺跡や周知の香山寺跡が含まれる。特に小山A遺跡や小山B遺跡は今まで遺跡が発見されていない調査区北西側であり、ここで須恵器などが採集できたことは重要であろう。また、香山寺跡は今まで須恵器1片のみであったため、今回の調査で2片の須恵器が採集できた。遺物が集中して採集できた地点がないことや調査区全体で古代の散布地が少ないとから、この地域の古代の様相を把握するには材料不足である。しかし、小山A遺跡、小山B遺跡、天神才勝遺跡と調査区

南部のハクラクテン窯跡から生産と消費の関係が伺われる。

(2) 中世の遺物散布状況（第6図）

中世の遺物は土師器1片、珠洲18片、越前1片、瀬戸美濃2片、青磁1片を16ブロックから採集した。

散布状況は調査区全域で散漫である。2片以上のまとまりがあるブロックは6ブロックであり、この中に前述でも挙げた小山A遺跡は珠洲4片、天神才勝遺跡は珠洲2片と瀬戸美濃1片が含まれる。これらの遺跡では古代の遺物の同等量の中世の遺物が含まれる。中世の散布地は調査区全体に多く存在するが、まとまった量の遺物を採集することができなかった。古代から中世にかけて遺跡も多くなることからこの地域では中世に多くの開発が進んだ地域だと考えられる。

(3) 近世の遺物散布状況（第7図）

近世の遺物は古銭1枚、唐津2片、それ以外の陶器7片、磁器2片を9ブロックから採集した。

散布状況は全体的に散漫である。古代、中世に比べて遺物の量も少なくなる。2片以上のまとまりがあるブロックは3ブロックである。この中に新たに発見された広谷表田遺跡が含まれる。広谷表田遺跡は唐津1片、近世陶器1片、近世磁器1片が採集できた。他の2ブロックは調査区東側に少し散布する程度である。広谷表田遺跡周辺で採集した遺物については、それよりも若干南にある松守永福寺近世墓跡との関連が伺われる。

（田上和彦）

3 平成20（2008）年度調査地区との比較

平成20年度（吉江・石黒地区）と平成21年度実施の分布調査範囲（4頁第2図参照）は、同じ南砺台地および扇状地にあって、西が医王山、東が小矢部川にはさまれた地域に位置する。前者は医王山麓から砺波平野へと至る台地北西部の地区を占め、後者はより標高の高い地区を中心とする。小矢部川の西岸にあたる両地区的中央部には、小矢部川の支流である明神川が北流しており、水系的に同じ地域に属している。したがって、両地区における各時期の遺物の散布状況や量を比較することは、ひとつの地域における長期間の土地利用の変遷を知る上で重要なことと思われる。以下、昨年度の遺物採集点数と比較する形で見ていくたい。

縄文時代の遺物は、昨年度は未確認であった。今回は医王山麓の善徳寺跡（中世社寺）近くから縄文土器片1点が採集されている。両地区ともに点数としては極めて少ない。しかし、縄文散布地の数自体は、医王山麓を中心にして10箇所ほど確認されている（3頁第1表参照）。

弥生・古墳時代の遺物は、昨年度と今年度を通じて確実なものは1点も採集されていない。この時期には主に平野部への遺跡の進出が予想される。ただし、平成18度分布調査範囲の東隣の地区（小矢部川の東側、山田川西岸）には3基の円形周溝状遺構と古墳出現期の多数の土器が検出された神成遺跡が近年明らかにされており、台地上でも河川沿いなどには少数ながら遺跡が存在することが考えられる。

古代の遺物は、昨年度は須恵器56片、土師器21片が27のブロックから採集されている。とりわけ昨年度調査地区のうち北部の、小矢部川と明神川とにはさまれたブロックにある松木遺跡に集中している。それに対して、医王山麓などのブロックからは数片の遺物が採集されたにすぎない。今年度調査地区では、明神川沿いの小山A遺跡から須恵器及び土師器片が7点採集されていることを除いて、遺物の散布は全体的にまばらな傾向である。

中世の遺物は、昨年度は珠洲16片、越前2片、常滑1片、瀬戸1片、青磁2片、土師器2片、瓦質土器1片等が21のブロックから採集されている。今年度調査地区的遺物は23点なので、昨年と同様けっして多いと

はいえない。しかしながら、古代の様相と比較してみると、より南部の標高の高いブロックにある、医王山麓の香城寺や広谷表田のような遺跡から遺物の散布が見られるようになる。

近世の遺物は、昨年度は越中瀬戸11片、唐津3片、土師器2片、それ以外の陶磁器片32片が25のブロックから採集されている。今年度調査地区の遺物は12点と少なく、散布もまばらであるが、この段階においても南部の標高の高いブロックに遺物の散布が見られる。

もとより分布調査からの限定的な評価ではあるが、各段階の遺物散布状況から南砺台地上における土地利用のあり方がある程度推測できるのではないかと思われる。すなわち、古墳時代以前の様相はほとんど明らかではないが、古代においては小矢部川や明神川沿いを中心に拠点的な開発や居住がすすめられていったことが伺える。中世以後は、より南部の標高の高い、医王山麓においても拠点的な開発や居住がすすめられていったことが伺える。なお、今年度調査地区の東隣、つまり小矢部川東岸の地区は平成19年度の分布調査範囲にあたる。ここでは近世の段階になると、河岸段丘を中心にして遺物の散布範囲が拡大し、散布量も急激に増加している。南砺台地の中でも最奥部にあり、医王山麓を中心とする今年度の調査地区ではこのような傾向はみられなかった。

(高橋浩二)

IV まとめ

今年度の分布調査は、南砺市の西部を占める旧福光町内を対象に、昨年度調査範囲の南に接する「福光」「広瀬」「西太美」の各地区において実施した。調査範囲は、小矢部川と医王山山麓部にはさまれた南砺台地および扇状地の標高約80~160mにあたり、中を小矢部川の支流である明神川が北流している。

今回対象とした地区を含む旧福光町内にあっては、市指定史跡の竹林遺跡をはじめとする縄文時代の遺跡が比較的多く分布するものの、これに続く弥生時代や古墳時代の遺跡は全くといっていいほど確認されていない。他方、縄文時代を遡る旧石器時代の遺跡についてみれば、「南山田地区」や「立野ヶ原」を中心に分布がみられ、今回の調査範囲に含まれる才川七つの場遺跡からは、貝岩製のナイフ形石器6点が発見されている。

弥生・古墳時代の遺跡分布が希薄なのに対し、古代に至ると次第に遺跡の数は増加はじめる。律令体制の整備に伴い越中国には「砺波郡」が設置され、そこには後に東大寺の荘園も形成されている。このように旧福光町の範囲が古代の「砺波郡」に含まれることは明らかであるものの、条里制の地割痕跡が未検出であることからすると、荘園経営の対象地はさらに低位の平野部が選ばれたようである。

砺波平野における古代の集落遺跡は、主として標高約60m以下に多くが分布するが、今回の調査範囲には「古館遺跡」や「ハクラクデン遺跡」などの古代の遺跡が存在している。両遺跡とも過去に発掘調査がおこなわれており、古代の遺構や遺物が発見されている。また古代の遺跡に連続して記せば、「広瀬館」や「西太美」地区の西方には信仰の山「医王山」(標高939m)がそびえている。豊峰「白山」を開いた「泰澄」による開山伝説をもつこの山には、古代に遡る山岳宗教関連の遺跡が存在する。最も遡る考古資料は「ショウゴン寺跡」から発見された縄文時代晚期の土器片であるが、これが信仰と関わる確証がないのでこれを除くと、今回の調査範囲に隣接して存在する「香城寺惣堂遺跡」から発見された9世紀前半の須恵器となろう。そしてまた、ほぼ同時期の土器が標高約800mの「三千坊遺跡」(現展望台)からも発見されているから、医王山の宗教活動が、平安時代前半頃に開始されていたことは十分に想定できる。そして実際に、1990年度から三カ年にわたり取り組まれた「医王山文化調査事業」によって発掘調査された「香城寺惣堂遺跡」からは、平安時代の礎石建物跡が検出されている。

中世に至ると旧福光町内には、さらに多くの遺跡が形成される。とくに小矢部川の対岸にあたる「北山田地

区」には濃厚な遺跡の分布が見られ、梅原遺跡群がその中心をなす。やや時代は下がるが「梅原胡摩堂遺跡」にあっては、中世莊園村落から「寺内町」へと発展変化する特徴的な遺構の変遷をたどることができる。砺波市の中世を復元する上で欠くことのできない重要な遺跡の一つである。

一方、今回の調査範囲に近い「医王山」においても、12世紀中頃から14世紀前半にかけて山麓部の宗教活動は最盛期を迎える。先述の「香城寺惣堂遺跡」や「若宮遺跡」「香城寺古宮遺跡」などが宗教遺跡群の中心をなすもので、先述の「文化調査」によって建物跡や墳墓跡などの遺構が発掘されている。これらはいずれも水田地帯から少し山側に入った山麓部にあり、その意味でも今回の調査範囲の、特に山裾に接する地点は注目されるのである。

今回調査対象とした範囲内には、これまでに41遺跡が周知されていた。そして今回の調査で、あらたに4箇所の遺跡を発見した。これにより計45箇所に増加した（第2表）。また41遺跡のうち5箇所の遺跡で、その範囲が拡張することになった。以下にその概要を記しておこう。

新発見の遺跡は、北から上げるとまず「天神才勝遺跡」がある。ここからは須恵器3片・珠洲焼2片・瀬戸美濃焼1片が採取された。中世に主体を持つ遺跡であり、南北約350m、東西約400mの範囲を推測しておきたい。次いで「小山A遺跡」からは、須恵器5片・土師器2片・珠洲焼4片・寛永通宝銭1枚が採取されている。中世から近世にいたる遺跡で、南北約600m、東西約350mの範囲を推測しておく。また「小山B遺跡」からは、須恵器1片・土師器3片・珠洲焼1片が採取された。中世に主体をもつ遺跡であり、南北約200m、東西約350mの範囲を推測しておく。最後に「広谷表田遺跡」からは、珠洲焼2片・唐津焼1片・近世陶器1片・近世磁器1片が採取された。中世から近世にいたる遺跡であり、南北約160m、東西約350mの範囲を推測しておきたい。

範囲を拡張した遺跡は、北から上げるとまず「祖谷遺跡」があり、北西へ約50m拡大した。次いで「西光寺・常本寺・真教寺跡」は南東へ約100m、「香山寺跡」は北へ約100m、南に約200m、「松寺永福寺跡」は西へ約160m、「香城寺遺跡」は北東へ約100m、それぞれ拡大した。

ところで今回の分布調査で採取した遺物の点数は、昨年度の213片に比べて87片と極端に少なくなっている。それは古代・中世の遺物でとくに顕著である。ただし古代についてみれば、昨年度は「松木遺跡」から一局集中的に多数が採取されているので、それを考慮すると全体的な傾向は今年度もほぼ同様といえる。これに対し、期待された中世の遺物は本当に少数しか採取できなかった。先に述べた医王山宗教遺跡群との関連からすれば、その活動が最盛期をむかえる12世紀中頃から14世紀前半にかけての遺物が少ないというのではなくはだ訝しい。しかしこれも、今回の調査範囲よりももう少し標高の高い山麓部から山腹部にかけてが、その活動の中心であったことを間接的に物語っているのかも知れない。今後の課題である。

以上、昨年度の成果を受け継ぎながら今回の分布調査の成果を概述した。今回の調査では採取した遺物数は少ないにもかかわらず、新たに4遺跡を見つけ、さらに5遺跡で範囲を拡大することとなった。今回確認した遺跡以外にも、完全に地下に埋もれ未確認のままの遺跡も存在することと思われる。また周知された遺跡にあっても、遺跡の規模や時期、性格などはなお不明確な部分が多く残されている。今後ともさらなる遺跡の把握を行うとともに、これらの遺跡の保護に務めていきたい。

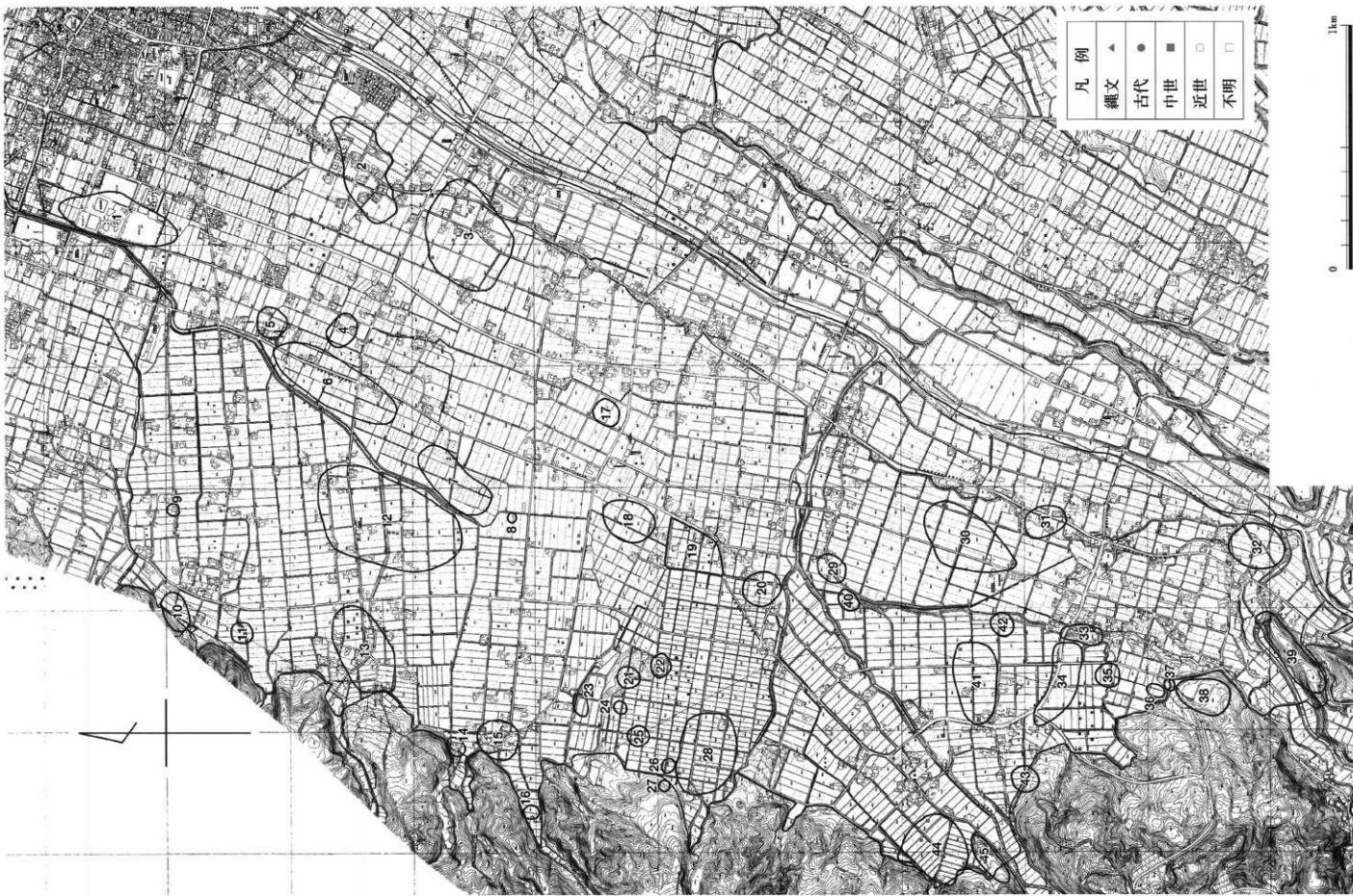
（黒崎 直）

参考文献

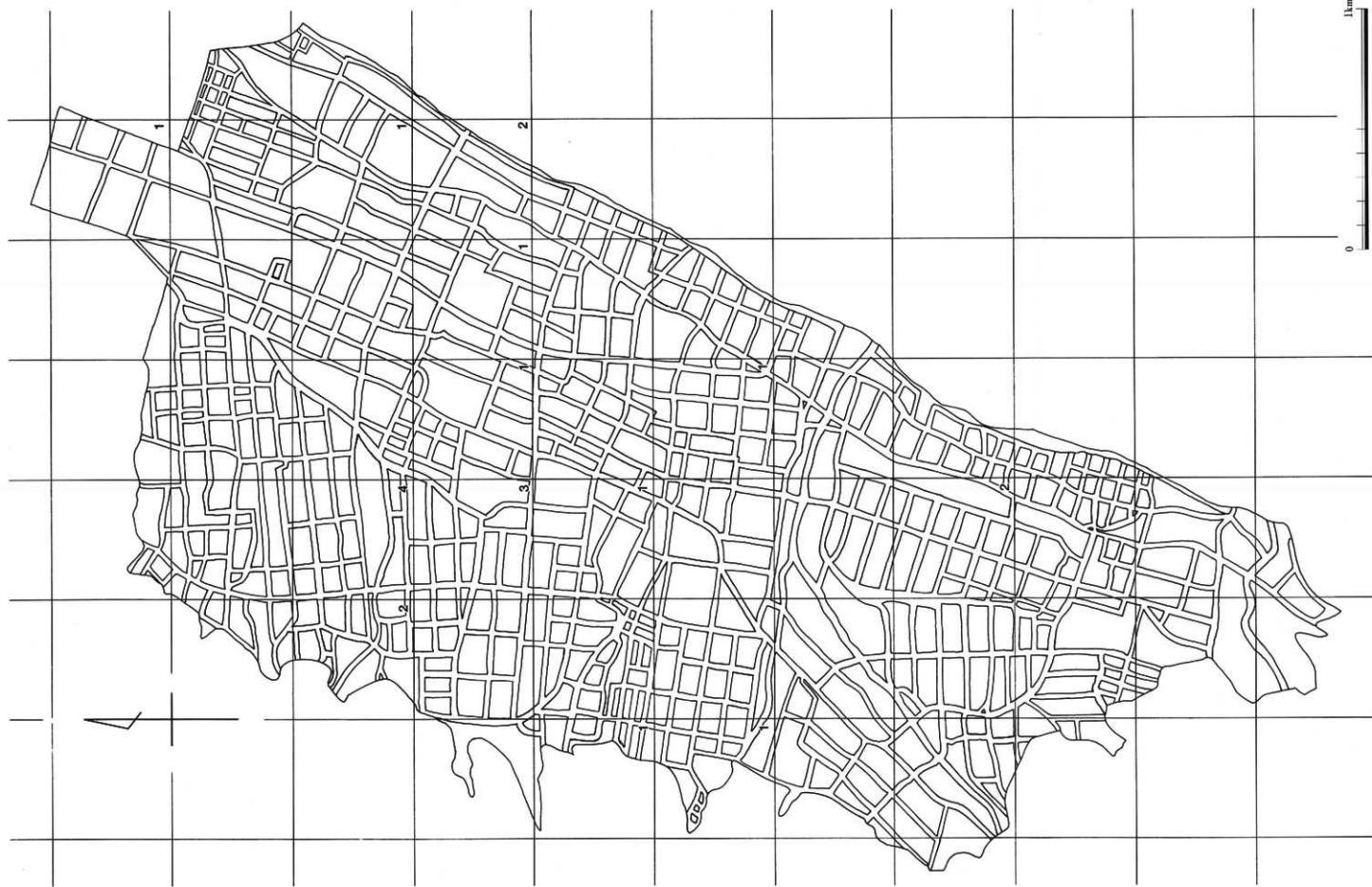
- 相賀徹夫1977『世界陶磁全集』3日本中世小学館
 医王山文化調査委員会1993『医王は語る』医王山文化調査報告書 福光町
 井上喜久男1992『尾張陶磁』ニュー・サイエンス
 上田秀夫1982『14~16世紀の青磁碗の分類』『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
 小野正敏・佐藤信・館野和己・田辺征夫2007『歴史考古学大辞典』吉川弘文館
 加藤藤九郎1972『原色陶器大辞典』淡交社
 小林達雄2008『総覧 織文土器』アム・プロモーション
 佐藤雅彦1976『日本陶磁全集17 唐津』中央公論社
 新潟市立教育委員会1990『三光館跡・宝積寺跡』
 珠洲市立珠洲焼博物館1989『珠洲の名陶』
 高梨清志2006『富山県の様相』『第19回北陸中世考古学研究会 資料集 中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』130~141頁 北陸中世考古学研究会
 中世土器研究会1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
 (財)富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所1994『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告書(遺構編)一東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告I-1』
 (財)富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所1996『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編)一東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告II-1』
 富山大学人文学部考古学研究室1989『越中上末窯』
 富山大学人文学部考古学研究室・石川考古学研究会1993『珠洲大畠窯』
 中村浩1981『和泉陶邑窯の研究—須恵器生産の基礎的考察—』(株)柏書房
 南砺市教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室2007『富山県南砺市埋蔵文化財分布調査報告2—福光地域1—』
 南砺市教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室2008『富山県南砺市埋蔵文化財分布調査報告3—福光地域2—』
 南砺市教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室2009『富山県南砺市埋蔵文化財分布調査報告4—福光地域3—』
 日本中世土器研究会1985『中近世土器の基礎研究』
 野々市町教育委員会1983『野々市町御経塚遺跡』
 平安学園考古学クラブ1996『陶邑古窯址群』I
 福光町史編纂委員会1971『福光町史 上巻』福光町
 宮山進一1997『越中国における土器師の編年』『中・近世の北陸 考古学が語る社会史』 桂書房
 吉岡康暢1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

第2表 調査結果一覧(新規、内容変更の遺跡のみ記載)

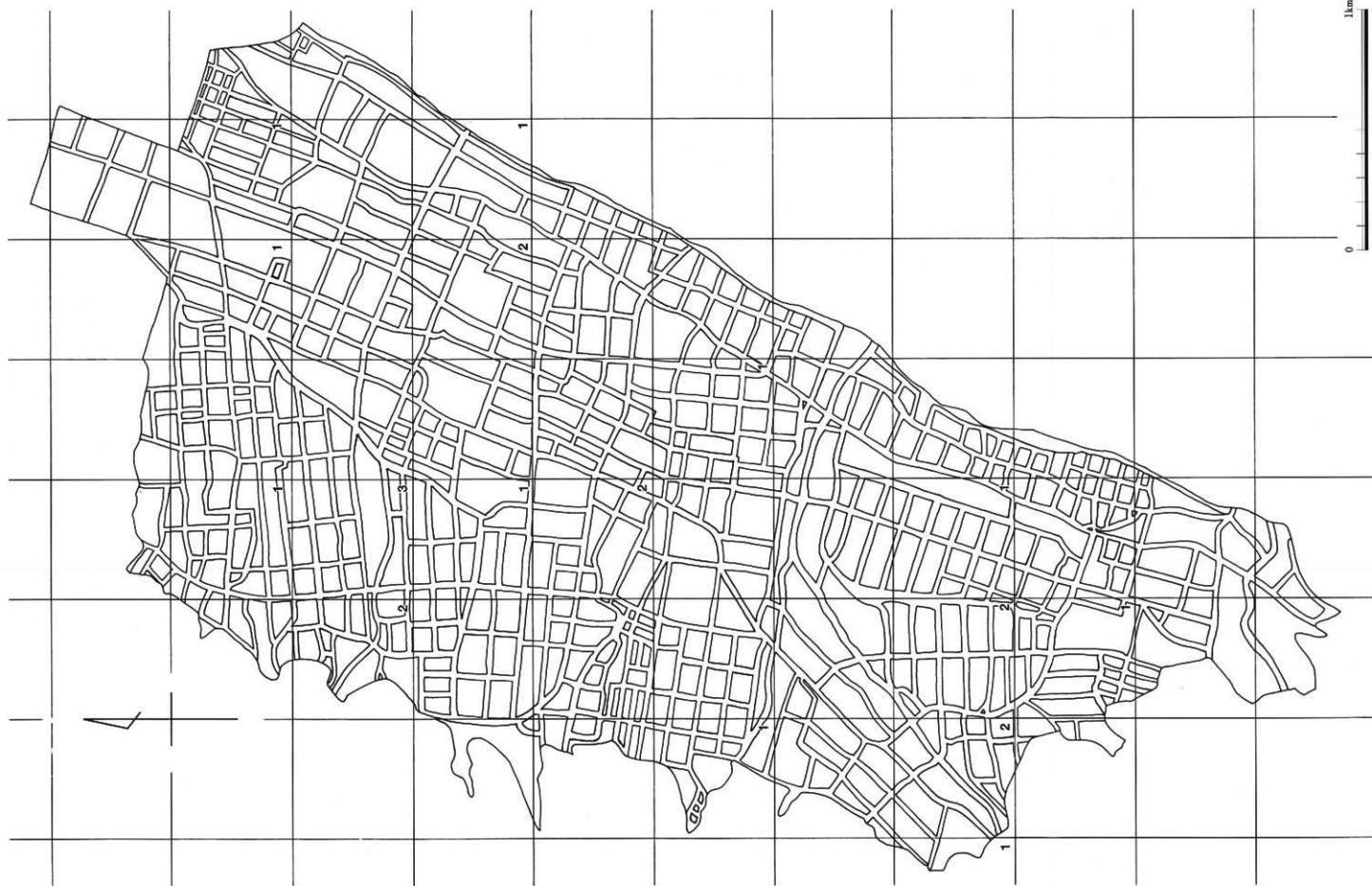
遺跡名	ふりがな	所在地	主な時代	種別	備考	登録番号
天神才勝遺跡	てんじんさいかせい	天神	古代・中世	古代散在地 中世散在地	H21新規	3
小山A遺跡	こやまえーいせき	小山	古代・中世	古代散在地 中世散在地	H21新規	12
小山B遺跡	こやまびーいせき	小山	古代・中世	古代散在地 中世散在地	H21新規	13
祖谷飛跡	そだにいせき	祖谷	中世	中世その他の	北西側範囲拡大	25
西光寺・常木寺・真教寺跡	さいこうじ じょうぎじ しんきょうじあと	祖谷	中世	中世その他の	南北側範囲拡大	28
青寺寺跡	こうざんじあと	才川七	古代・中世	古代社寺 才川社寺	北側・南側範囲拡大	30
松寺水道寺跡	まつでらようふくじあと	才川七	中世	中世社寺	西側範囲拡大	34
広谷浄土遺跡	ひろたにのむとてらいせき	広谷	古代・中世	古代散在地 中世散在地	H21新規	41
香城寺遺跡	こうじょうじいせき	香城寺	中世・近世	中世社寺 中世塔頭	北側範囲拡大	44



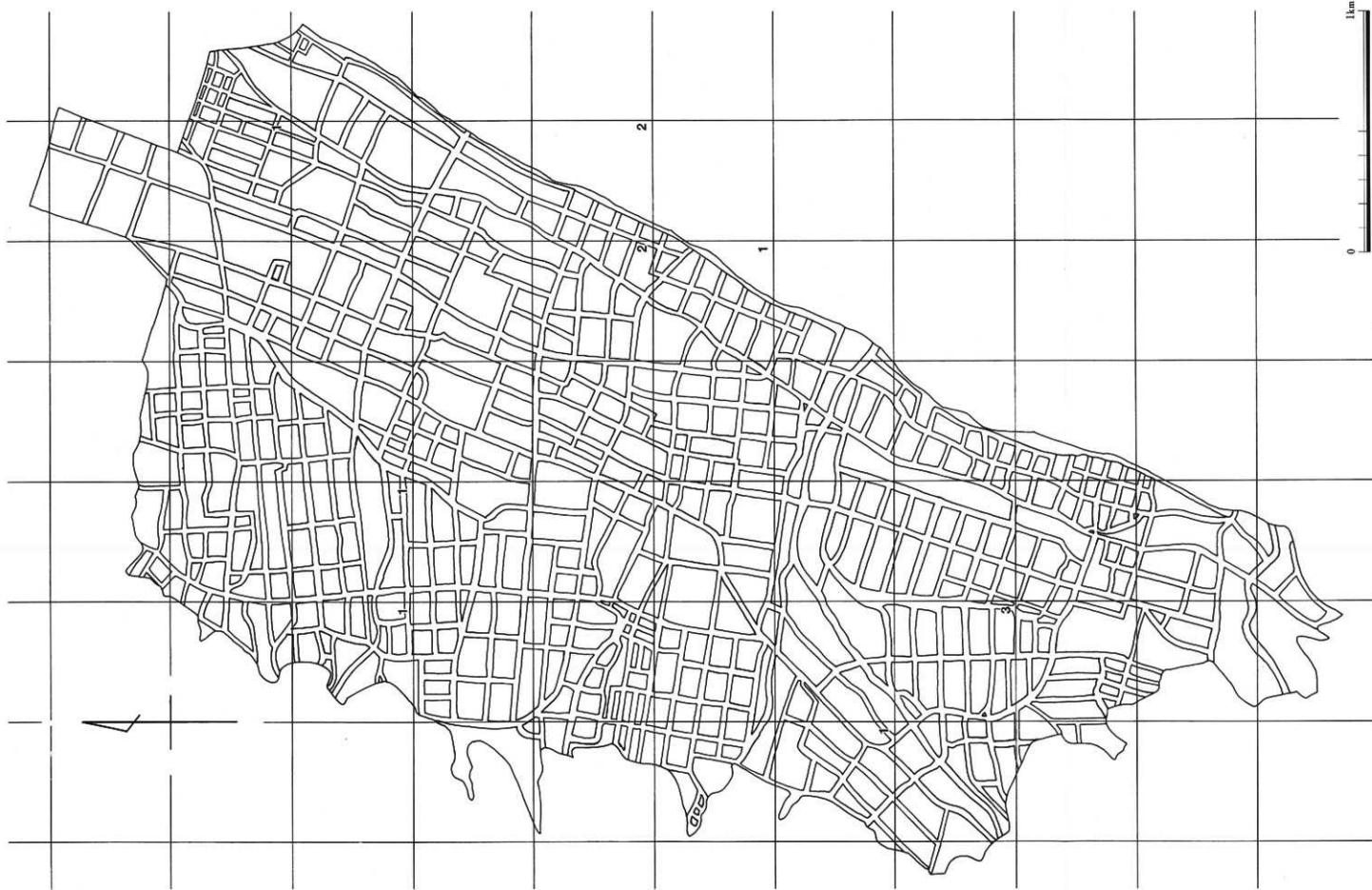
第5図 古代の遺物散布状況 ($S = 1/15,000$)

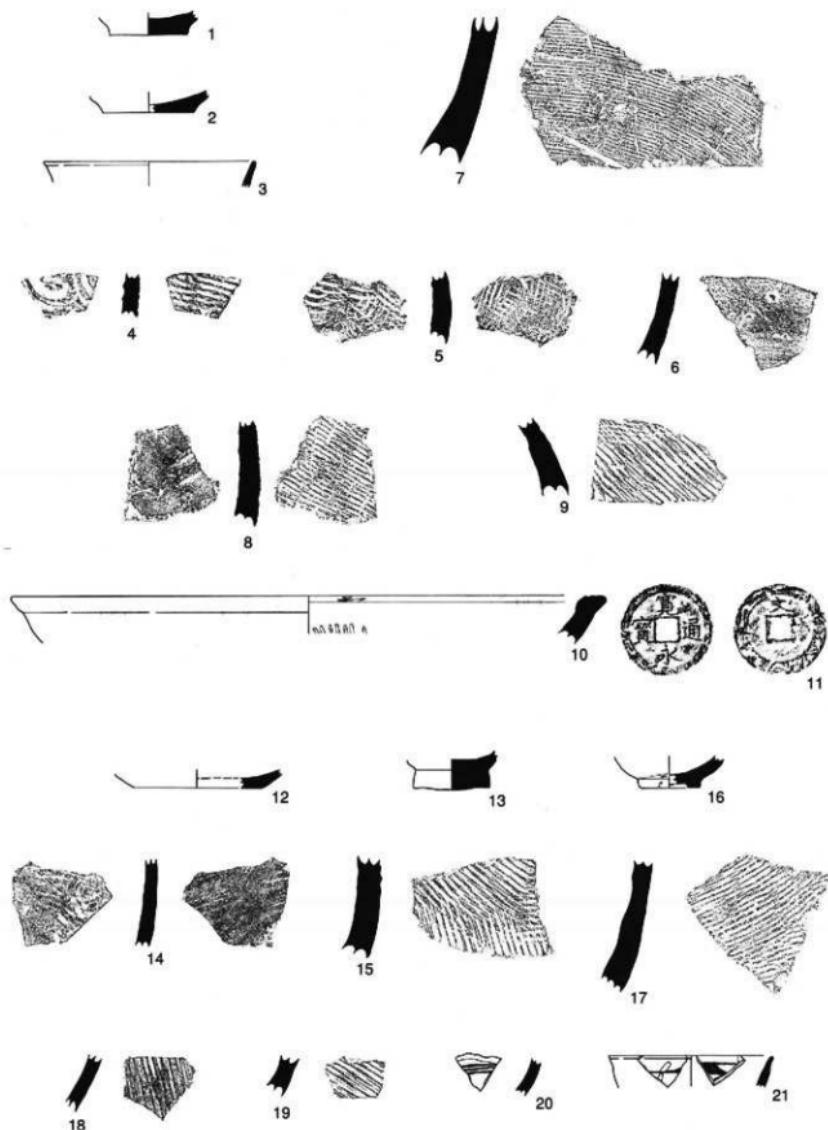


第6図 中世の遺物散布状況（S = 1/15,000）



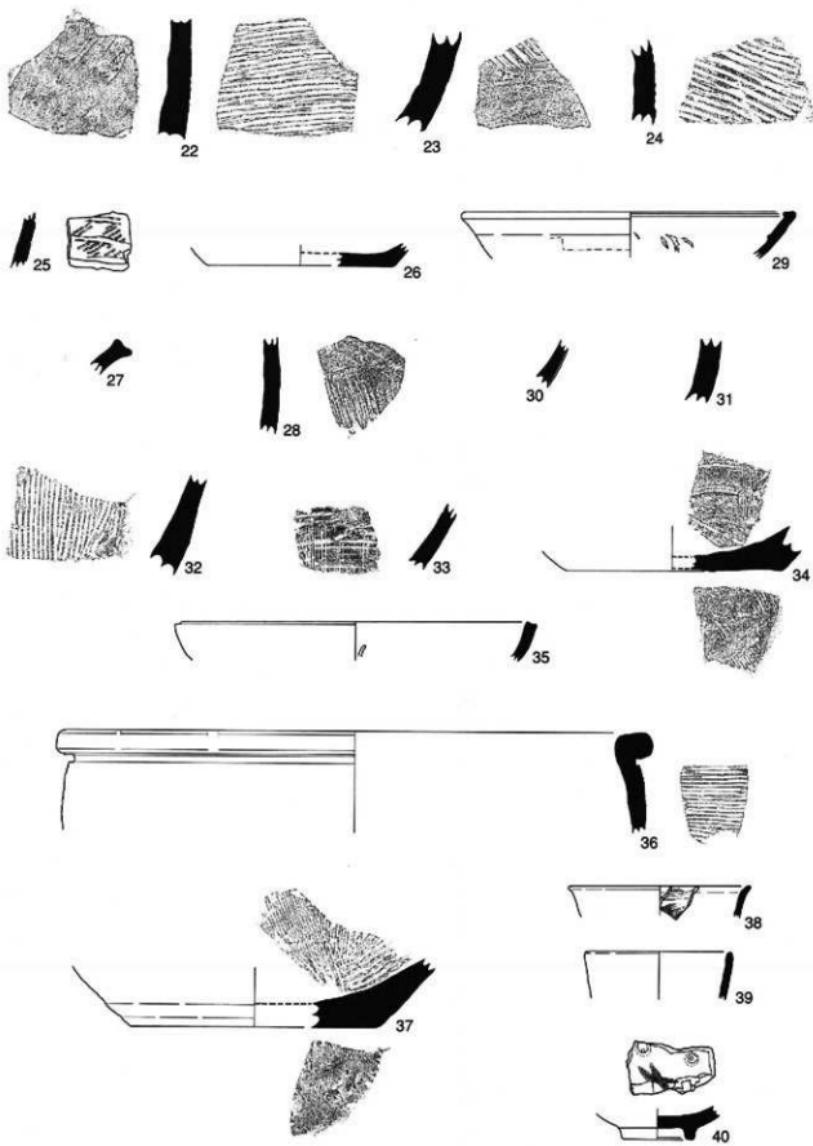
第7図 近世の遺物散布状況 (S = 1/15,000)





第8図 遺物実測図(1)
1~11 小山A遺跡 12~15 小山B遺跡 16.17 天神才勝遺跡
18~21 広谷表田遺跡 (1~10 12~21 S=1/3 11 S=3/4)

0 10cm



第9図 遺物実測図(2)

22 西光寺・常本寺・真教寺跡
(22~35 37~40 S=1/3
36 S=1/4)

23~24 香城寺跡

25~26 遺跡範囲外出土品

0 10cm



1



2



3



4



5



6



7



8

図版1 遺跡全景(1)

1. 五瀬遺跡 2. 福光天神遺跡
6. 竹内Ⅲ遺跡 7. 竹内Ⅳ遺跡

3. 天神才勝遺跡 8. 医王山千手堂跡

4. 竹内遺跡 5. 竹内Ⅱ遺跡



図版2 遺跡全景(2)

9. 山本城跡 10. 善徳寺跡 11. 山本遺跡 12. 小山A遺跡
14. 柿谷寺跡 15. 妙敬寺跡 16. 鎌白山遺跡 13. 小山B遺跡



17



18



19



20



21



22



23



24

図版3 遺跡全景(3)

17. 梅の宮跡 18. 祖谷Ⅱ遺跡 19. 本敬寺跡 20. 祖谷Ⅲ遺跡 21. 祖谷御坊山遺跡
22. 祖谷神明社遺跡 23. 善念寺跡 24. 善休寺跡



25



26



27



28



29



30



31



32

図版4 遺跡全景(4)

25. 祖谷遺跡 26. 矢倉畑遺跡 27. 八幡社跡 28. 西光寺・常本寺・真教寺跡
29. 古館遺跡 30. 香山寺跡 31. カナン堂遺跡 32. 釈迦堂遺跡



33



34



35



36



37



38



39



40

図版5 遺跡全景(5)

33. 宗善寺遺跡 34. 松寺永福寺跡 35. ハクラクデン窯跡 36. 才川七遺跡
37. 松寺永福寺近世墓跡 38. 才川七の場遺跡 39. 才川城跡 40. 婆々堂遺跡



41



42



43



44



45



46



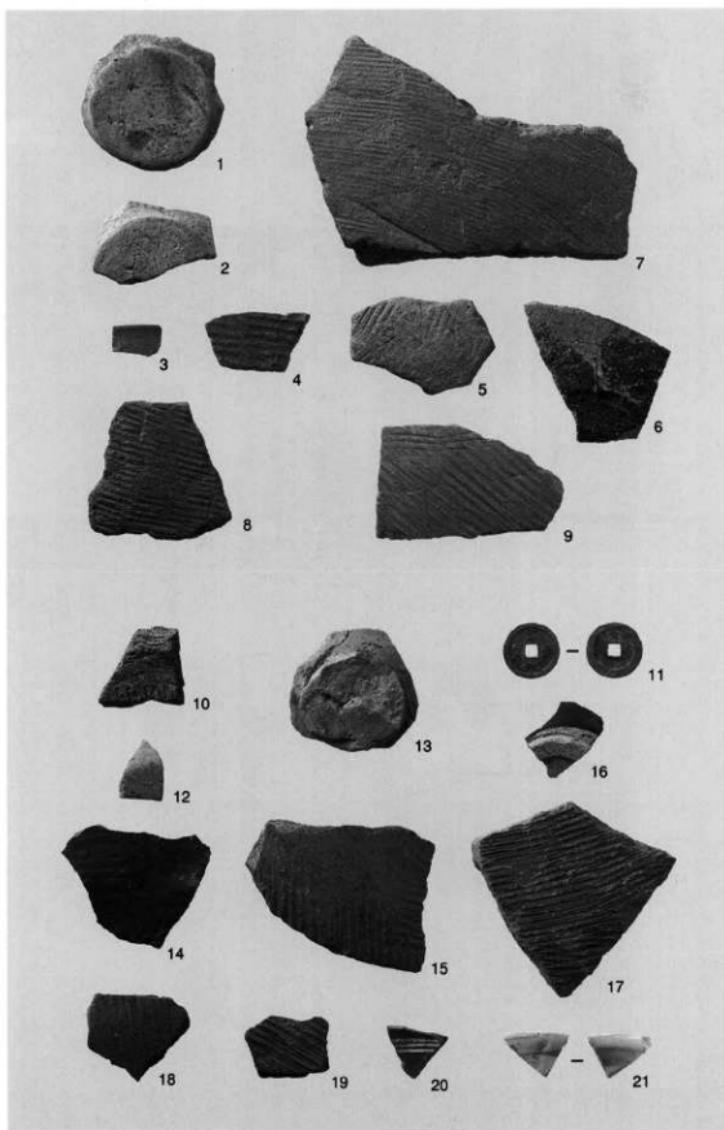
47



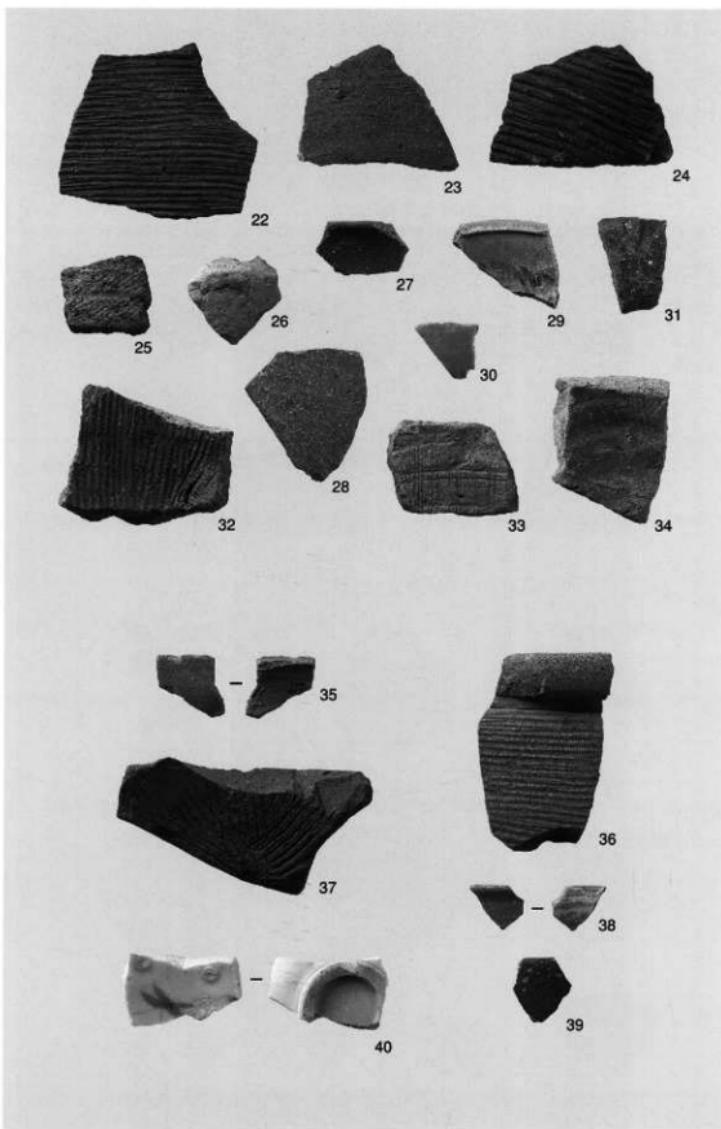
48

図版6 遺跡全景(6)

41. 広谷表田遺跡 42. 広谷経塚 43. 広谷林遺跡 44. 香城寺遺跡
45. 香城寺ジョウジャ遺跡 46~48. 調査風景



図版7 遺物写真(1)



図版7 遺物写真(2)

報告書抄録

ふりがな	とやまけん なんとしまいぞうぶんかざいぶんぶちょうさほうこくご ふくみつちいきよん							
書名	富山県 南砺市埋蔵文化財分布調査報告5 -福光地域4-							
シリーズ名	南砺市埋蔵文化財調査報告書28							
編著者名	黒崎直 高橋浩二 田上和彦 井澤昇 井上恭一 岩崎俊樹 北島裕子 塙澤恭輔 濑原史織 宮嶋厚平 宮崎順一郎							
編集・発行機関	南砺市教育委員会							
所在地	〒932-0292 富山県南砺市井波520 TEL(0763)23-2014				南砺市教育委員会			
発行年月日	西暦2010年3月15日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° '	東経 ° '	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
市内遺跡	富山県 南砺市 地内	16210	-	36° 34' 00"	136° 52' 40"	20090411 ~20090412 20091031	-	-
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
市内遺跡	-	古代 中世 近世	-	須恵器、土師器 中世土師器、珠洲、 青磁、越中瀬戸、 瓦質土器、唐津、常滑、 その他近世陶磁器		-		

南砺市埋蔵文化財分布調査報告5 -福光地域4-

平成22年3月15日

発行 南砺市教育委員会

印刷 牧印刷株式会社

